

## Catalina de Aragón (1485–1536)

——スペインに王女として生れ、イングランドに嫁す——

富 永 浩

よくも悪くもずばぬけた個性、および政治力によって近世に名をはせるヘンリー八世の妻となり、国政に参与さえするほど夫に尽したこの異国出身の王女が、その後、離婚されること、そしてそれとのからみのもとにイングランドがローマ教会から離脱・独立すること、以上は大方知悉の歴史的事実であるが、本稿ではスペイン側の資料をつかつての照射——従ってヨーロッパ通史ではあまりなされることがない——に力点をおきつつ、この類まれな魂の持主である女性の人間像をうきぼりにすることをつとめたい。

スペインのアラゴンの皇太子、フェルナンド(Fernando. 1452. 5. 10—1516. 1. 25) とカスティリアの王女、イサベル(Isabel. 1451. 4. 22—1504. 11. 26) は1469年10月19日、バジャドリッドで結婚している。これによってカスティリアとアラゴンの合併によるスペイン国家統一の途がひらかれるのだが、この夫妻を通常、カトリック両王と呼んでいる。

両王には男女とりまぜて、5 人の子が生れる。

年齢順にあげると、次のとおり。

(1) Isabel (1470. 10. 1—1498. 8. 23)

パレンシア（マドリードの北、200 キロ）で生れる。1490 年、ポルトガルの皇太子、Alonso と結婚。夫が死ぬと、新しいポルトガル王、マヌエル一世《金

持王》(Manuel. 1469—1521. 在位1495—1521)と、1497年9月、結婚。

長男 Miguel が1498年、生れる。が、彼女はその年、28歳で死ぬ。一時、スペインとポルトガルの王位継承者だったこの子は1500年7月20日、2歳で死ぬ。

(2)Juan (1478. 6. 30—1497. 10. 4)

セビリヤで生れる。カトリック両王の子どもたちの中、ただ一人の男子。スペイン皇太子。

成人し、オーストリアのマキシミリアン一世の王女、マルガリータ (Margarita. 1480. 1. 10—1530. 12. 1) とブルゴスで、1497年4月3日に結婚。その時、新郎は19歳、新婦は17歳。しかし、彼は結婚半ヶ年で、1497年10月4日、サラマンカで死ぬ。夫の死後、若妻は女兒を死産する。この青年がこんなに早く死ななければ、スペイン史はかんぜんに変わっていた。

(3)Juana (1479. 11. 6—1555. 4. 12)

有名な《狂女ファンナ》Juana la Loca がこの女性である。トレードで生れる。

1496年10月21日、オーストリア王、マキシミリアン一世の皇太子、フェリペ (Felipe. 《美男子》の名がある。1478—1506) とフランドスの都市で結婚。夫は18歳。妻は17歳。

この結婚は、前項(2)のスペイン皇太子とオーストリア王女との結婚と交換のようにして、ほぼ同時におこなわれている。

このファンナは夫とともにフランドス (ニーデルランド) を所有するが、この他に、1505年1月11日以来、父王、フェルナンドの後見のもと、スペイン王女だった。

夫は名が示すとおり、美男で、女にだらしくなく、彼女の発狂はそれについての嫉妬、もしくは心労が原因であったと、俗説では語られる。しかし、この発狂の真の原因は遺伝にもとめなければならぬ。というのは母方の家系にこれがあったのだ。

フランドスからスペインを夫とともに訪ずれていた時、1506年9月25日、ブルゴスで夫を失う。彼女は27歳、夫は28歳だった。もうそのころ、はっきりした精神錯乱をみせていた彼女は、以来、約50年の間、尼僧院に隔離され、狂人として過す。この夫婦には6人の子が生れている。

#### (4)María (1482—1517)

コルドバに生れる。(1)の死後、ポルトガルのマヌエル一世に後添いとして貰われる。新婦は18歳。夫は31歳だった。夫婦には10人の子が生れる。

当時、ポルトガルは海外貿易によりヨーロッパで第一等の繁栄を誇る国家であり、首都リスボンは世界各地からはこぼれてくる物資であふれていた。文化的にもマヌエル様式を創り出すなどして、おおいに繁栄する。

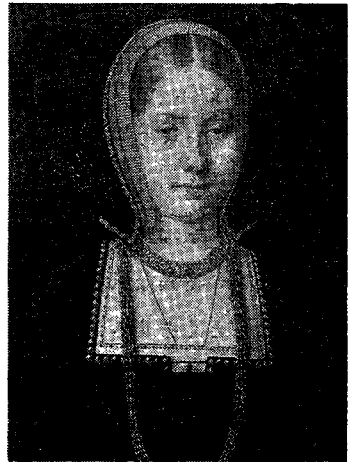
こうした豊かな国の王妃となり、沢山の子にもめぐまれ、姉妹中、もっとも幸福な女性が彼女だった。35歳で死ぬ。

#### (5)Catalina. 本稿の主人公。

カタリーナはカトリックの両王の末子として、1485年12月15日、Alcalá Henares (マドリーの東、30キロ)で生れる。

かくのごとく上記の王子王女の誕生地がバラバであることからわかるとおり、当時のスペイン宮廷は各地を転々としていた。これが永久不変の首都をもつのは、1560年ごろ、フェリペ二世がトレードからマドリーに行政府をひきいて移り住み、そこを首都と定めてからである。

モーロ族の最後の首都、グラナダがキリスト教軍の包囲の前に陥落するのが1492年1月



Catherine of Aragon  
(Miguel Sittow 画)

だから、彼女の誕生はその時より 6 年前の話である。だから彼女の幼少時代というのは、イスラム勢力をヨーロッパから駆逐するという文明史的使命のもとに数世紀にわたり行われてきた大戦争のいよいよ大詰めの段階がアンダルシアを舞台に展開する時代だった。かくしてこの娘は馬蹄を鳴らして国道を馳ける伝令、司令部の天幕にあわただしく出入りする将校、前線へと行進してゆく歩兵部隊といった戦時情景を幼い目におさめながら育つ。

母親であるイサベル女王は高い背丈、乳のように白い肌、そして金髪といった外形、性格的にははげしいカトリック信仰、旺盛な義務感、精神的エネルギー、以上を特徴とする女性だった。

末子であった彼女は両親からいたく可愛がられる。これは後日の彼女の性格に色濃く反映しないわけにはいかなかった。というのは明るく、しあわせに生きる傾向、他人を信じて疑わぬ純良さ、そして曲ったことに対しては頑固なまでにとことんたかう妥協のなさ、これらは両親の鐘愛のもとにのびのび育つというこの幼児体験なくしてはありえなかった。

6 歳の彼女はグラダナの城内で若いモロ王、ボアブデイルが彼女の両親に城の鍵を渡すという歴史的光景に立ち合う。

この時までの、グラダナ城中でイスラム兵たちが大小のドラムをうちならしながら挙げるときの声、そしてそれがアンダルシアの野山に無気味にこだまするひびき、あるいはイスラム将兵のエキゾチックな中にも凛々しい武装の姿、これらをこの娘は知っていたはずだし、また各地に居着くモロ族の農民たちや商人たちの奇異な風習も目にしたことだろう。

かくのごとくキリスト教と異教文化との対決の中で物心づいてゆくのが彼女だとすれば、成人してからの彼女に一貫するところの烈しく、毅然たるカトリック的姿勢はごく自然なことだった。というのは、こういう生の対イスラム体験をもっている人物は、たとえば彼女が後に縁づくイングランドなどにはひとりとして存在するはずもなかった。

父王フェルナンドはスペインの統一をはじめとして、15世紀後半から16世紀初頭にかけての国内政治の課題を見事にはたした君主だった。また国際政治にあっても、打算とかけ引きに長じた現実主義者として列強を相手にごうもひけをとらぬ経略の人だった。肖像画に残されている、田舎の農夫をおもわせる、ずんぐりとした風貌にも、たくましく、やり手の個性がよくあらわれている。

カタリーナは父から現実社会でのしぶとい行動性、つまり政治的体質をさずかったとおもわれる。

ところで右のスペイン王家の子女の婚姻図譜にも明らかなとおり、縁組の相手は必ず外国の王家である。すなわち、自分の国家の中の人間、つまり王族とか、あるいは誰か高位の貴族とか、そういった人間の中から、ということは王位にとってはどれも臣下に属するものの中から、驍なり嫁なりを迎えることは絶対的といってよいほどしていない。

しかし、これは何もスペインにかぎったことではなく、当時のヨーロッパ社会におけるしきたりだった。(そして、この原則はヨーロッパの王室社会にあって現代にいたるまで、いくらかの程度をもって息づいている。)

何故そんなしきたりがつくられたかという理由だが、それは主なもの二つあった。

第一はヨーロッパが古代、そして中世以来、ローマ・カトリック教会に思想的に文化的に統一支配される社会だったということである。(プロテスタントの発生はもっとおくれる。) こうして国がちがっても、生活規範が一つのわく組みの中におさまるところの身内意識ができていた。早い話、相互のコミュニケーションにしても、ラテン語という公的言語があった。

第二はヨーロッパにおける身分制のきびしさにあった。これも中世の封建制からのつづきだが、階級の上下の区別のうるさは、現代からみると、想像を絶するものがあつた。王室を頂点とするこのヒラルキーの線の中に人間万般の

なりわいが組み込まれていたわけで、要するに一に家柄、二にも家柄の社会だった。

そんなことだから、王家が自分より位の下の家と縁組みするなんてことは考えられるはずもなく、そうなれば外国の王家と結ばれるよりほかに方法はなかった。

これにはすぐれた側面的美点が付随するというのは右にのべた第一の、カトリック社会の均一性からくるところの身近さがあるにはあったものも、その反面、国境の彼方の国から王女なり王子なりを迎えるということの、どこかおとぎ話めいたロマンチックな雰囲気は否定すべくもなかった。その目出度さ、はなやかさというものは、いかなる大がかりな国事行為もくらべられるべくもなかった。すこし大げさな言い様を許してもらえるなら、これは人類が発明した歴史上最高の傑作的ページェントであったかもしれない。

（日本はこの方式をとらない。単一民族国家として、独自の、いわば排外的な文化の形態をつくるこの国は、父家長的、神権的思想の中で臣下から妃をえらぶことになる。）

それはそれとして右の婚姻図譜をじっくり眺めていると、もう一つの面白い特徴性格がはっきり出てくる。

それは、そこにフランスが出てきていないということだ。出てくるのはポルトガル、オーストリアである。しかし、フランスはスペインの隣国であるとともに、ヨーロッパ第一の強国だった。それが何故、婚姻の相手から除かれたのか？ その答えを言うと、それは逆説的に隣国であり、強国だから除かれたのだった。

ヨーロッパの中央を占めるというずばぬけた地の利にもってきて、産業はこのほか盛んなこの国にスペインがライバル意識を燃やす第一の具体的原因はイタリア支配をめぐる両国の係争だった。これへの対抗策としてスペインはヨーロッパのもう一つの大国、オーストリアに接近する。

ポルトガルとはどうか？ これとの親密関係はイベリア半島の安定のための絶対的条件にぞくした。それが婚姻に示されてくる。こうしたフランス牽制のためのスペインの親墺路線は、その後、16世紀全体を通じてひたすらおしすすめられる。

そしてそこに末娘のカタリーナのイングランドへの嫁入りが実現する。スペインとすれば、右の西墺同盟の仲間にイングランドをひき入れることに成功したわけで、フランス包囲網がこれでぐっと力を加える。

これらを念頭におきながら右の図譜をみつめていると、スペインの、フランスへの壮大な怨念と、それに裏うちされた熾烈にして緻密な政治戦略がすかし絵のように浮びでてくる。

さて、本篇の主人公、カタリーナとイングランド王の長男、アーサー(Arther。1486—1502)との縁組みの計画はまだ当人たちが揺籃のなかにあるころからすでに始められていた。(こういうことは珍しいことではなかった。)生れたのはアーサーの方がカタリーナより1年おそい。アーサーはその中にプリンス・オブ・ウェールズに叙任される。

そしてカタリーナが4歳になる1489年3月27日に、スペインとイングランドの間に、Medina del Campo 条約が結ばれる。つまり前から討議されていた友好同盟のつめのための使節がロンドンからこのメデイナ・デル・カンポの町(マドリーの北西、50キロ。当時、カトリック両王が暮していた)を訪ずれ、槍試合、闘牛を含む盛大な歓迎がくりひろげられる中で25綱目からなる協定が締結される。その協定は3つの柱から出来ていた。その3つの柱とは、(1)対フランスの攻守同盟、(2)通商問題、(3)カタリーナとアーサーの結婚、以上であった。

時のイングランド王、ヘンリー7世(1457.1.28—1509.4.22)という人物は、30年におよぶ国内戦争、いわゆる《バラ戦争》を解決し、チューダー王朝を開

いたところの王であり、幼い日からの苦難をしのいだ末に権力をにぎっただけあって、器の大きな明君だった。この王は激動後の秩序回復につくしつつ、国民国家の概念をめざして、官僚機構に近い中央政府的な体制をつくるべく努力した。かくしてこの王はイングランドの絶対主義の基盤を準備したのだが、国内的には国庫をゆたかにすることにつとめ、対外的には武力によらず、外交重視主義をとった。

慎重さと機略にひいでた国際的な政治家という点ではスペインの方の国王、フェルナンドとよい勝負だった。この2人がかくして行きついたのがこの王子・王女の結婚だった。

カタリーナは幼児から娘になりつつある。そして前にも言うとおりの過程でグラナダの陥落などもおこる。

もっとも彼女の結婚は先の条約によってすべて決着したのではなかった。両国の王による互に相手の手の中にさぐりを入れながらのねばりづよい、面倒な交渉を経て最終的な合意に達したのは、これがはじめて議題にのぼってから7年もたったころだった。

その中にカタリーナの兄の皇太子は死に、姉たちは他国に嫁してゆく。こうして両親の膝下にのこるのは末子の彼女ひとりとなる。

ここで注意すべきは、そのころのスペイン宮廷がつくりだしている人文主義的レベルの高さだった。折しも《ルネッサンス》がヨーロッパ各宮廷に花開きつつある時だったが、とりわけ国土を回復して意気あがるこの国の宮廷のもとには、ヨーロッパのすぐれたヒューマニストたちが蜜にすいよせられる蝶のように集まってきていた。それとこの国では期せずしてグラナダ陥落の年とかさなったコロンブスによるアメリカ新大陸発見が、一つの明るい光彩をもって王室の周辺をにぎやかに染めていた。

カタリーナは姉たち同様、こうした知的香気の中で、すぐれた教育をほどこされる。この時代のヨーロッパで彼女がさずかった教育の高さに匹敵するのは、



イタリアのいくつかの国の王女たちにその例がみいだされるだけだった。

当時、教養の第一にあげられるのはラテン語だったが、カタリーナはラテンの古典をらくに読みこなすばかりでなく、それでの日常会話にも不自由しなかった。

在イングランドのスペイン大使のもとから外交行李がとどくたびに、ラテン語によるアーサーの手紙が入っている。彼女の方もラテン語でそれへの返事をかく。

そしていよいよイングランド、スペイン両国間で婚儀の次第が具体化し、彼女が父と母のもとを離れる日が近づく。

かくして彼女が1年中、白雪をいたゞくシエラ・ネバダの峰々を遠望する岡の上の、南国の妖しいエキゾシズムがあふれかえるグラナダの王宮に訣れを告げ、北の海の彼方にある、霧深い国へと旅立ったのは1501年5月だった。この時、彼女は15歳と6ヶ月だった。

この時代、そしてこれからの16世紀を通じ、外国へ王女が嫁入りする場合、以後はとつぎ先の国の権力の中枢の人間になってしまうのだから、一旦、出たら二度と自分の生国へとかえることはできなかった。つまり、両親に行ってまいりますの挨拶をすることは、即それが永遠のさよならを意味するというのが原則だった。カタリーナの場合にしても、まさにそのとおりで、目出度い限りの旅立ちは、両親にとり、また娘にとり、泪のながれてやまぬ旅立ちだった。

一行はトレードの僧上、マラガの僧上、それにカブラ公といった当代随一の顯臣スタッフに統べられる男性陣、そして女官長を先頭とする60人の侍女・雑司がこれに従う、といったなかなかの陣容だった。

彼等はアンダルシアから3ヶ月をかけてゆっくりスペインを北西へとよぎり、ガリシア地方の要衝ラ・コルーニアに達し、その港を出航する。このラ・コルーニアの港はその後の歴史のうえで忘れ得ないいくつかの舞台の証人となった

が、それについては紙数の関係ですべて省略せねばならぬ。

海へと乗り出したカタリーナたちは、そこで暴風に見舞われ、ラレード (Laredo。ビルパオの西、50 キロ) に避難。カンタブリアから北にかけての水域はわたしたちが想像するよりずっと手ごわい荒海なのだが、おさまると見てそこを出ると、またすごいしけに遭遇、高波をくらい木の葉のようにゆられたすえ、ようやく11月2日、イングランド南海岸の港、プリマウスに着く。

目的のイングランドの地をカタリーナの一行が踏むや否や、海をこえて南の国からはるばる輿入れした姫君に対する歓迎の嵐がわきおこる。これは中央の指令などで用意されたものではなく、民衆の間から自然発生的に生れたものであったことに注意せねばならぬ。

新しい土地の人々へのこの最初の顔見せの瞬間から、カタリーナは持前の静かな落着き、すぐれた決断力、上品な愛嬌でもって人々を魅惑してしまう。

ここからロンドンのウエストミンスター宮殿までの3週間におよぶ道のりは、民衆側からの愛情の燃えあまりの連続だった。随員の1人は故国のイサベル女王にあてゝ、《救世主だとして、これほどの歓乎をもってお迎えあそばされることはないでございましょう。》と、齒の浮くようなお追従をつかって報告する。

カタリーナの一行がウエストミンスター宮殿につくと、おりしも狩の最中だったヘンリー7世は馬でかけつける。そして息子の嫁の姿を速刻、拝みたい、と申し出る。が、キャサリン (Catherine。これよりイングランド流にしたがって、この呼び名をつかうことにする。) の内廷をとりしきる女官長は、

《晴れの御婚儀によって王子様の奥方はおなりあそばす日までは、どなた様にも、たとえ王様といえども、姫君のお顔をお見せするわけにはまいりませぬ。》

と、勿体ぶった口上をもって拒否する。

そう言われ、さすがのヘンリー七世も、一旦はすごとと退く。

が、これに対して《それはおかしい。婚儀がどうのこうのと、もっともらし

いことを並べるけれど、婚儀は国家間によりもう何年も前にすまされていること。従って姫はすでに国王の息子の嫁御であり、国王の臣下なのだ。これに国王が面会をことわられるいわれはない。》といった反論が家来の中からあみだされ、それをよいことに、ヘンリー七世はキャサリンの居場所に強引に入りこんでゆく。このあたりは新しい王朝をみずからの手でひらいた男の自信がよくのぞいている。

母親ゆずりのかがやくような金髪をなびかせ、おなじく母親ゆずりの乳白色の肌をほんのりとしたバラ色にそめる、その時のキャサリンは可愛いというより美しかった。そして何よりもしっかり成長した体つきにピチピチした若さがあふれているのが素適だった。国王はまず嫁の手にうやうやしく接吻した後、讃歎の目でそのような彼女を貪るようにしばらくうち眺めてから、やさしく抱きよせる。

それから何時間かして、おひろめの宴会がひらかれる。お聾さんのアーサーはその時はじめて対面する。キャサリンが彼等とかわす言葉はラテン語だった。

食事がおわると、国王はじめアーサーたちは王宮内の、キャサリン用に定められた棟の方へと移る。そこではキャサリン側がもてなしとして演出するスペイン舞踊が準備されている。

キャサリンはまずアーサーを相手に一曲おどる。それから一人のスペイン女性と組んで、もっとはげしいリズムの踊りを披露してみせる。そこにはイングランド側の国をあげての歓迎にこたえ、一刻も早く彼女が皇太子妃として新しい社会にとけこむことを念じるスペイン側随員一同のあたたかいはげましがあったことは言うまでもない。それはそれとして、スペイン人には民族的性格としてそういう場合、だんだんとボルテージがあがってゆくに連れ、忘我の境にあるかのごとく、目をすえ気味にして情熱に身をまかせるという傾向がある。彼女もその例外ではなかったらしい。筆者には晴れの席にいるという緊張と羞

恥心が逆にいっそう大胆にしていたにちがいないその時のキャサリンの、足をつよく踏みしめる姿が目にはうふつする。この踊りはアーサーよりも父親の国王の方をもいたく感動させる。ここにはキャサリンの純粹さ、率直さがまずのぞいている他に、その延長上の、高くわきかえる女らしい感情の波、そしていざとなったら、男をたじろがせる捨て身の果敢さなどもかくされているようにおもわれる。その日の国王の抱擁を皮きりに始る一連のドラマにおけるこの時の踊りを、キャサリンとしても生涯忘れることはなかっただろう。

これから程なく、11月14日、ロンドンのセント・ポール寺院でアーサーとの結婚式。アーサーは白ずくめの礼装を身にまとい、その美しさは天使さながらであった、と言う。

キャサリンは花婿の弟のヘンリー（Henry。後の八世。1491. 6. 28—1547. 1. 28）を介添役として、彼に手をとられながら入ってくる。ヘンリーはアーサーより5歳年下で、その時まだ10歳だったが、すでに性格も顔付きも、兄に負け

ないようにしっかりしていた。後日、アーサーが死に、さらに父王のヘンリー七世が死んでから、ヘンリー八世として国王の座にのぼるのがこのヘンリーだったが、その妻にキャサリンがなり、彼ゆえに愛のよろこびと苦しみをとことんなめる運命になるとは、まだ誰も予想できなかった。

はなやかな会食がもよおされるのはこういう際のいつものきまりだったが、そうした席で人々の関心があつまるのは当然のことながら、キャサリンだった。彼女は国王ヘンリー夫妻のとなりに坐り、それをイングランド、スペインの顯臣たちが囲んだ。新郎のアーサーはどこにいたかというと、



Henry VIII  
(Hans Holbein 画)

別の、弟や妹たちがかたまるテーブルの方にいた。

アーサーはすべて言われるままに動くといった、おとなしい性格の若者で、本を読むのが何よりもの愉しみといった、どうみても国王になるよりも僧上になる方がむいている人柄だった。

連日つづく祝典行事がおわると、新郎新婦はウェールズ地方にでかける。

その頃国中に疫病が流行しており、二人はそれにかかる。キャサリンの方は結局、治るのだが、アーサーはそれにかつことが出来ず、1502年4月2日にルドロウ (Ludlow。ロンドンの西北西、120キロ) の城で死んでしまう。キャサリンが女官たちにかこまれて病氣とたたかう間、彼女には知らせぬようにして遺体は運ばれてゆく。

ところで病死するアーサーとの5ヶ月半にわたるこの時の付合いが、25年後、ヘンリー八世によるキャサリン離婚の裁判にあたり、重大な争点にもちだされる破目になる。その争点の鍵のところに横わるのは、若者たちの結婚生活の真相、つまり有体に言う時、二人はまことの夫婦であったのか、すなわち肉体の交りがあったのか、というきわめてリアリズム的なテーマだった。ちなみにキャサリンは夫をなくした時、16歳と5ヶ月であり、アーサーはそれよりもいくらか若かった。

ローマ法王庁とキャサリン本人に対抗して離婚を強行しようとするヘンリー八世の方の言い分とすれば、亡き兄と彼女には肉体交渉があり、短くとも真の夫婦であった。それゆえその次に行われた自分とキャサリンとの結婚は、聖書に禁じられた、兄嫁をめとる行為であるがゆえに、もともと無効である。従って自分がこれからしたいとおもっている新しい結婚に支障はないという論理になった。これに対し離婚を背んじないキャサリンの方とすれば、アーサーとの関係は潔白で名のための夫婦であり、従って次のヘンリーとの結婚こそ唯一の正式の結婚であったという主張を展開する。

こういう意味合いをもつての、双方の言い分が対立する裁判、というより、

ヘンリーの目的達成のため初めから判決のきまった茶番劇裁判といった方が正確だったが、ヘンリー八世側はその法廷に自分を有利にするための証言者を次々に送る。こうした証言者の一人はこれについての以下のようなエピソードを神聖な証言台でのべる。ある朝、キャサリンとともにした寢床から起きたアーサーは、いつもの習慣に反して、飲み物をもとめる。それを運んできた侍僕がいぶかしげに微笑するのを見ると、若いアーサーは上機嫌で言う。《私はとても暑いスペインの中心にいた。その旅で喉がひどくかわくのだ。》

この証言が馬鹿げた、眉つばの作り話であることは今更言うまでもない。

第一に二人の年令の幼さの件がある。もちろん後にも言うように、もう大人であったこともありえるわけで、いちがいにセックス不在とはきめられない。だがそれにしても世間にうとい、上品な王室育ちにもってきて、とりわけ高尚な趣味を個人的にもっているアーサーが、こんなきわどくえげつない冗談を口にしたとは信じがたい。しかも、それから25年がたっている。王宮の奥深くの、更に枕もとの秘密を再現できるには遠い昔すぎる。ともかくもテロや懐柔をおもいきりつかって遂行されたこの時の法廷をスペインの史家は人類史上、これほどみぐるしく卑しい法廷はなかった、とまで評している。

しかし、幼い二人の結婚についての問題はもっと深い謎をひめているのも事実である。つまり、キャサリンの言葉はその通りにとってよいのか？ 嘘はそこに一つもなかったのか？ というのは、少年少女の性のたわむれといった程度のものが存在しなかった、とは言いきれないし、そしてもしそれが真実ならば、それも男女の性のいとなみの一種にあたらないとは言えない、ということなのだ。

さらにこれについては次のような心理分析も考えられる。すなわち彼女自身、嘘をついているという自覚はゆめゆめもたなくても、次のヘンリー（八世）との、成人男女の間の夫婦生活の有様があまりに充実し、めくるまでに強烈であったため、その生々しい記憶の前にかつての少年・少女の夜の交りが色うすく

ぼやけ、実在感をまったくなくしてしまう、そのためセックス不在を誓っているという作用はなかったのか、という推理である。これも否定できないようにおもわれる。いずれにせよ、こういう男女間の真実は第三者の他人には所詮、のぞき得ない、二人だけの機微であって、永久の神秘のベールにつつまれている、というより仕様ない。しかし、神秘のベールの中にあるがゆえに、キャサリンの告白の方が本当は正しいのだった、ということも反対にあり得たわけである。

とも角もキャサリンは16歳5ヶ月で夫を失い、後家となった。すでに新しい国の王家の一員になってしまったとは言え、こういうあまりに若すぎる未亡人の出現の場合は、故国に帰る途がないでもなかった。が、スペインとの友好のための人質に使おうとする目的などもあって、ヘンリー七世は彼女をスペインへ帰したがいらない。

政治家の国王はそこでキャサリンをいずれ後継ぎになるはずの次男のヘンリーにめあわせることを考える。が、当のヘンリーはその時まで11歳であった。これではいかにしても齢が若すぎたし、キャサリンとの齢の差もすこし大きすぎ、早急の結婚は無理だった。

ところで国王ヘンリー七世と王妃のエリザベスの夫婦仲はきわめて円満で、男3人、女4人が生れるが、男子はアーサーが死んだ今は、ヘンリー（八世）がいるだけだった。王妃は息子、アーサーの死をいたく悲しんだといわれる。

その中に王妃、エリザベスは出産がもとで子供もろとも他界する。その時、国王、ヘンリー七世はまだ46歳であった。

国王はそこで後添えが必要だったが、そこでまず第一に考えたのは世継ぎとなるヘンリー（八世）の嫁に予定するところのキャサリンのことであった。しかし、息子の嫁を自分の嫁にするというこの身勝手な計画に対してはスペイン側が承知するわけもなく、この話は御破算となる。

こういう曲折をはさみながらも、ヘンリー（八世）とキャサリンの結婚をめぐる交渉はスペイン、イングランド両国政府のあいだで着実にすすめられていた。イングランド国民もそれを祝福する気持でいた。そしてキャサリン自身を言えば、日一日とたくましい若者に成長しているヘンリーを意識しないでもなかった、ということもあっただろう。

しかし、ヘンリー七世は国庫をうるおすことを孜孜として努めた人物だけに、吝嗇気味があり、キャサリンへの手当金をだんだん詰めてくる。

こういう状態が彼女のまわりでつづく頃、1504年11月26日に、スペインで母親のイサベルが崩じる。女王は53歳だった。イングランドにいるキャサリンの方は19歳に近かった。

ところでフランドス（ニューデルランド）には彼女の姉、ファナとその夫のフェリペがいて、統治していた。1506年の初め、このフェリペとファナの夫妻がスペインへと渡る旅の途次、暴風のため、イングランドの海岸に避難してくる。6歳ちがいの姉との再会はキャサリンをひどくよろこばせる。が、女にだらしないフェリペは、そのみならず、政治の上でも不徳義漢で、スペイン・ロビーの代表だったキャサリンを遠ざけ、ヘンリー七世との間で反スペインのための協定を検討するといった妙なことを行ったりする。

その件はおくとして、娘時代は家族のなかでもっとも明朗な子であった姉が、暗く、沈みきった女になりはてていたのにキャサリンはおどろく。それはあきらかに異常の兆候であった。一行はそれからスペインを志し、その年（1506）4月2日、例のラ・コルーニアに上陸。

が、9月25日、天罰でもくだったみたいに《美男子》フェリペはブルゴスで死ぬ。後に残された妻のファナはこの頃から本式の狂人の仲間入りをする。

しかし、この件には話のおまけがついていた。ファナのイングランド滞在中、その美しさに強い印象をもったヘンリー七世は、彼女が未亡人になると、その錯乱傾向の情報が耳にとどいていなかったはずもないのに、そんな事は意に介



さず、彼女を再婚の相手に考える。彼女が手に納めている権力と財産をねらったことだった。というのは彼女の地位は今やスペインとニーデルランドを所有する立場にあった。しかし、もちろんヘンリーの夢は実現するわけもない。

キャサリンと一緒にイングランドに渡ってきたスペイン人の廷臣や女官たちは、もうそのころになると、みんなスペインにかえりたがる。が、キャサリンだけは彼等とちがいで、この国に骨をうずめる決心でいる。それももったもて、彼女は皇太子ヘンリーの婚約者の身であったのだから。言うまでもないことだが、彼女はもうずっと前から言葉もペラペラになっていた。

そうこうする中に、ヘンリー七世が1509年4月21日、痛風と結核が原因で死ぬ。享年57歳だった。

かくして皇太子ヘンリーがついに国王となる。ヘンリー七世は生前、何故か、皇太子ヘンリーとキャサリンを婚約させておきながら、二人が結婚することを許さなかった。

そこで先王の死から2ヶ月もたたぬその年の6月11日、グリーンウィチで、カンタベリー大司教ウオーラムの司式のもと、新しい国王ヘンリー（八世）とキャサリンとの晴れの婚儀があげられる。それは喪中であるにもかかわらず、華美と豪勢をきわめ、それに続く祝典では槍試合、舞踏会、仮面劇等々、趣向をこらしぬいた催しが際限なくくりひろげられる。一体にヘンリーという人物は度胆をぬくことをやってのける趣味があったが、喪中の式典の実行もそうなら、おもいきって派手な、これらの催しもそうで、これはこの趣味の治世における第一番手と言えたかもしれない。

ところで、父親の在世中、息子のヘンリーは戸外のあそびに仲間のいたずら者たちをかたらい、目茶苦茶な乱暴をして興じる一面、公園への散歩に出るのも父君の寝室を通り抜けなければ出来ないといいた抑圧ぶりに甘んじてもいた。複雑な屈折がそれなりにあったのだろう。ところで結婚式の時、ヘンリー

（これより八世と呼ばずに、ヘンリーとだけ呼ぶことにする）はちょうど18歳、キャサリンは23歳と半ばだったから、5歳半ほどの年上女房ということだった。

炎の燃えるようなブロンド色の髪をもち、いきいきとかがやく目をするヘンリーは、背丈も肩もすでに充分に成人に達する、否、それどころか、並の成人を圧する程の立派な発育ぶりで、まさに偉丈夫の面影をすでにただよわせた。ういういしい力がみなぎる青春の美しさのさなかにあった。

これに対するキャサリンはどちらかと言うと、小柄できゃしゃな方にぞくし、優雅な動きを得意とした。性に飢え、気狂みみたいにプレーキのきかぬ状態の若者を一方とすれば、一方は心にせよ体にせよ、熟れきった女性だった。といったわけで、年上の女性の母性的なやさしさも加って、初心の男が欲望をぶつけるには最適の存在がそこにはあった。

二人はベットのうえで熱い抱擁に酔いしれる。ヘンリーの側はとも角として、大切なのはキャサリンの方にとってのこれらの意味であったが、結論として彼女は魂までもとろけつくすまでのよろこびに浸った。夫の愛により彼女は人生の光のすべてを飲みつくす。若い夫は彼女にとり、たくましく美しい神だった。夫を想うと、彼女はつねに畏敬といとおしさにふるえた。

筆者が何故、これほどくどいまでにこの件にこだわるのかというと、これがキャサリンの悲劇の一生というものを考える時、その原因の基底によこたわるからである。

ヘンリーはヘンリーで、新婚の感動の中でスペインの彼女の父君、フェルナンドにあて、《たとえ誰をも自由に私がえらべるとしても、私がすすんでえらんだのは彼女だったことでしょう。》と書く。

とは言え、ヘンリーをセックスに明けくれる、そして戸外や室内の運動を含むもろもろの遊興にうつつをぬかして飽きない低次元の人間と片づけては、とんでもない間違いだった。要約すると、当時のヨーロッパの国王の中、若いな

がら、知性と芸術的才能の抜きんでた正真正銘のインテリ君主だった。というのは先王ヘンリー七世の宮廷でよい師に出合ったばかりでなく、すべて理想的な教育環境をめぐまれたのだった。そこにはエラスムス (1466—1536)、トマス・モア (1478—1535) といった面々がつどっていた。彼等も若いヘンリーの頭脳の資質の高さをたたえてやまなかった。つまるところ、ヨーロッパ王室の中ではめずらしいぐらいに翔んでいる若者だった。

彼はラテン語、イタリア語はもちろん、フランス語、スペイン語もたくみにあやつった。よく本を読み、作詩にもうちこんだほか、自分で作曲さえした。彼の創った音楽作品を私たちは現在、たとえば《ルネッサンス音楽シリーズ》といったレコードを通じ、つぶさにきくことができる。また、時代はもっと後になるが、21年にはマルティン・ルーターのプロテスタント神学に対する論駁文をラテン語で発表し、法王レオ10世から《信仰の擁護者》という褒めこばを寄せられたりしている。

キャサリンの方も知性と教養では負けなかった。夫婦は二人だけで内外の国家的テーマを一緒に考えるのだった。ことに文化領域でのキャサリンの発言は重視され、彼女の発想による制度で今もそのままイングランド社会に生きつづけるものも少なくないと言われる。

二人の夫婦仲はむつまじいの一語につき、ヘンリーの服には彼とキャサリンの頭文字の《H》と《K》が金糸でもって縫いとられているといった体たらくで、それを描いた絵も残っている。何かの相談ごとをもって側近が国王に近づくと、《王妃に訊いてくれ。》、《王妃と話さねばならぬ。》、《それは王妃もよろこぶだろう。》がヘンリーの口癖だった。

ヘンリーは男子の誕生を熱望する。

結婚翌年の1510年1月にキャサリンは女兒を流産する。それからまたすぐに妊娠する。

やがて1511年正月、ついに男子を出産する。ヘンリーの感激は言うまでもな

い。洗礼式はかつてないほどの盛大さで、それをすますと、ヘンリーは聖母への感謝のため、ウォルシンガム（ロンドンの北、160 キロ）へ巡礼に出る。こうした国王を前にする民衆の熱狂もすさまじく、彼のもとに押しよせてくると、ヘンリーの着ている衣装から例の《H》と《K》の字をはぎとるほどだった。

が、せっかくのこの王子はロンドンのリッチモンド宮のゆり籠の中で死ぬ。（もし死なずに成人していたら、キャサリンの離婚もなく、その他これと一緒に起こるもろもろの事件もなく、イングランドの歴史はまったくちがっていただろう。）

この時代が夫婦歴における第一期の、熱愛時代で、キャサリンにとって天国にあたる。

キャサリンは王妃としてスペイン寄りの路線をヘンリーにとらせることに成功していた。

1513年、つまり結婚4年にして、ヘンリーは大艦隊をひきいてカレーに上陸、そこからフランスに攻めこむ。これにはオーストリーとスペインの、背後からの協力があつた。

ヘンリーが出陣のため国を留守にしている期間、摂政役をつとめたのはキャサリンだった。

フランスはこの危局にあたり、盟友スコットランドに支援をもとめ、それに応じたスコットランド軍は手薄になっている北イングランドに侵入する。これに対して、防衛軍の総司令官の任につくキャサリンは、動じることなくノーフォーク公指揮の部隊を前線に送り、はげしい戦闘のすえ、スコットランド軍をうち破り、スコットランド国王、および将校の大部分を戦死させるという大戦果をおさめる。（9月7日）

この時、キャサリンはみずから馬に乗り、全軍を鼓舞したという。キャサリンが生涯、イングランドの国民、そして貴族の間で人気をたもった原因の一つは、この件における彼女の勲功によつた。

彼女はフランスの陣営にいるヘンリーに手紙で勝利を報じ、すべての名誉を夫に帰した。やがてヘンリーが凱旋してくる。それを迎えるキャサリンは夫の前に膝まづいて、うやうやしげに祝賀する。

が、この軍事行動での無理がたたって、彼女は間もなく死産する。

1514年2月、ヘンリーは多分天然痘とおもえる病気にかかり、重症。キャサリンはこの夫を懸命に介抱する。

この年、トマス・ウォルジー (Thomas Wolsey. 1475—1530) がヨークの大僧上となる。ヘンリーの教晦師から出発したこの男は、もともとイプスウィッチ (ロンドンの北、120キロ) の肉屋の俵に生まれるが、ずばぬけた頭脳と手腕にめぐまれた上、野心のかたまりで、この翌年の1515年には枢機卿、つづいて大法官 (宰相) の地位につく。こうして栄達の途をのぼりつめ、外交・内政の両面において並ない権勢をふるうに到るこの人物の思想は、一貫して親フランス主義であった。ここにキャサリンと彼との宿命的な敵対関係の必然がよこたわっていた。彼がいかに栄華をほしいままにしたかその例は数えればきりがなが、その中から二つばかり挙げると、もともとヨーク大司教の彼が執務したロンドン公邸で、後にヘンリーによって没収され、ホワイト・ホールと呼ばれた邸館がその一つ。ここには常時、500人の使用人がいたといわれる。第二はロンドンの西郊のハンプトンに建てられた彼の個人的所有物で、ハンプトン宮殿の名で今も残っている邸館。

キャサリンはその年の12月、またも王子を死産、もしくは生んでから失うという不幸を味う。

大陸では政治の情勢がはげしく動いていた。1514年、フランスのルイ12世 (1462—1515, 在位1498—1515) は52歳で、体力もひどく衰えていた。そこへヘンリーの妹のメアリ (1496—1533) が18歳で後妻に縁づく。それがたたって1515年1月、結婚後わずか3ヶ月で国王は死ぬ。そこでフランスの国王の座に

つづのがフランソワ 1 世(1494—1547。在位, 1515—1547)。登位するやいなや、彼はベネチアと結び、イタリアに大軍をひきいて侵入、ロンバルディアを一挙に占領し、ミラノに落着く。イングランドをはじめヨーロッパ諸国はこれにあわてる。

スペインにとっても、これは重大な挑戦だった。この緊張の中で、1516年 1 月25日、スペインの国王、つまりキャサリンの父のフェルナンドが巡礼地、グアダルーペ (Guadalupe。マドリーの西南西, 180 キロ) への道すがら、カーセレス (Cáceres。マドリーの西南西, 220 キロ) の近くで病没する。

遺言によってフランドスに暮すカルロス (1500. 2. 24—1558. 9. 21) がカルロス一世の名のもとにスペイン国王となる。この青年は先にのべたごとく、オーストリアのマキシミリアン一世の長男、《美男王》フェリペの長男だったから、血筋でいえば、カルロスはオーストリア王室の直系だった。そしてキャサリンにとってはその姉、フアナ (その時はスペインで狂人となっていた) の長男であるから、彼女の甥にあたった。

翌1517年、カルロスは運命のいたずらから自分の所有となったスペインにむけて、北の海へと旅立ち、9 月17日、上陸。しかし面白いことに、彼についてきた彼の閣僚は、ほとんどがフランドス生れで、スペインからみれば、外国人だった。当のカルロス自身、この国の王でありながら、スペイン語は話せなかった。

この年の10月31日、独乙ではマルティン・ルター (1483—1546) が宗教改革ののろしをあげる。これから拡がってゆくプロテスタント運動がカトリック体制を掲げるカルロスの政治生涯を大きく狂わせることになることは、まだ誰も予想できない。とも角もこの時点でのヨーロッパは、カルロスの後半生のヨーロッパの面影をまだまったくもたなかった。

ところで、カルロスがスペインにいる間のこと、1519年 1 月12日、カルロスには祖父である神聖ローマ皇帝、マキシミリアン一世が死ぬ。その報せをカル

ロスサラゴースに在る時、聞く。

そしてその年の6月28日、フランクフルトで皇帝選挙がもようされ、カルロスが皇帝に決まる。それには裏でツッガー家などの金が動いたことは有名な話であるが、フランスのフランソワ一世はカルロスとこれを争い、敗れる。フランソワの、生涯つづくカルロスに対する遺恨の一つはこれにもとづいた。

この結果をもって、バルセローナのカルロスのもとに急使がたち、10日でそれが着く。

さて、ことばも出来なかつたぐらいなじみの少なかつたスペインの政治は、カルロスにとりひどく厄介で、これには手をやく。それにすっかり時間をとられたすえ、どうやら片づけたカルロスが、独乙での皇帝の戴冠式にのぞむため、例のラ・コルーニヤを出港するのが1520年5月21日。しかし、彼のスケジュールは途中、イングランドに寄ることになっていた。

イングランドでは、キャサリンが甥のカルロスの来訪を首をながくして待っている。何故なれば、フランソワ一世と夫のヘンリーとが北フランスのピカデリーで会見することが決っていたからである。議題はカルロスをめぐるの意見交換であつたことは言う迄もない。キャサリンとしては、ヘンリーがフランスに出かける前に、カルロスをつれてきて、夫と識りあわせておく、というように是が非でも運んでおきたかつた。

しかし、右に言うとおおり、カルロスのスペイン出発がずれたため、イングランド到着がおくれる。ヘンリーはフランスとの約束があるから、いつまでも待っているわけにはいかない。それを前にしてキャサリンは気が気でない。もう駄目だと彼女が諦めかけるギリギリのところで、カルロスに乗せた艦隊がドーバーに着く。それは1520年5月26日のことで、静かな海を追風にめぐまれ、ラ・コルーニヤから7日しかかからなかつた。

近くのカンタベリーではヘンリーとキャサリンの王夫婦が待機している。

その夜、カルロスはドーバー城で休んでいる。そこへヘンリーが挨拶のため、

ほとんど伴なしで馬を駆り、かけつけてくる。次の日、今度はカルロスの方がカンタベリーに赴き、ヘンリーとキャサリンに迎えらる。その夜は明け方までの大宴会。

スペインのカルロス側の意図としては、イングランドとフランスとの友好が深まるのに釘をさして予防しておきたいということで、その気持はヘンリーの妻、つまりカルロスの叔母のキャサリンも変りなかった。そして一方、イングランドのヘンリー側としては、カルロスの危惧をのぞき、あらためて信頼をさせることで将来の友好を確実にしておく必要があった。

ヘンリーは当時31歳。頭のはたらきは活発で、すこぶる雄弁だった。これに対するカルロスの方は20歳の青年で、ことばは到って少く、慎しみぶかく、ほとんど憶病に近かった。これをみる時、人間の性格は変ることを痛感せざるをえない。というのは後日の30代、40代のカルロスは、カーロッパを力強くひっぱる覇気と豪毅では当代、誰にもひけをとらぬ超大物政治家だった。その性格は感情の波がはげしく、表現はあからさまだった。普通、カルロス五世の人間像というのはこちらであった。これと比較する時、この20歳の、おずおずとしたカルロスは、あまりに離れすぎているとしか呼びようがない。

さて、こんな経緯をすごしたすえ、カルロスは5月31日、フランデス経由で独乙をめざし、イングランドを発ってゆく。独乙ではアーヘンの大聖堂で皇帝戴冠式をあげるになっている。

一方、ヘンリーはカルロスを送るとすぐにドーバーからカレーに渡り、その地から北フランスへと出向く。そこでフランソワ一世と会見する。両雄による《錦繡の宴》(Field of Cloth, Champ du Drap d'Or, Campo de Paño de Oro)とよばれるこの時の会見は、その名が語るとおり、絢爛たる催しによって歴史上、有名である。

1516年2月18日、キャサリンは女の子のメアリ (Mary。—1558. 11. 17) をグ



リニッジ宮殿で生んでいた。キャサリンがヘンリーのために生んだ6人、乃至7人の子のなかで育ったのはこの娘一人だった。

キャサリンは娘のメアリ・チュードルのために、とびきりの学者たちを教師にえらび、テキストなども新たに編ませるなどして、理想的な教育システムをつくり出す。

ところでヘンリーとキャサリンの夫婦関係にはそろそろ大きな転機が訪ずれようとしていた。つまり1509年の結婚以来の第一期である熱愛時代が終りにかかっていた。この第一期はいいところ8・9年であり、この天国の時代につづくのがこれからくる第二期の、いわゆる責め苦にさいなまれる練獄の時代であって、時間的にはやはり8・9年におよぶ。こうしていよいよ《キャサリン》という悲劇的ドラマの暗い主旋律がこの辺からかなでられはじめる。

キャサリンは結婚以来、ほとんど毎年といってよいほど妊娠と分娩をくりかえし、ようやく30の半ばを越さんとしていた。これが彼女の体の線を崩し、女性としての魅力にかなり衰えを目立たせていることもやむをえなかった。ヘンリーがこれに満足するわけもない。こうして出てくる最初の女性問題が女官、ベツレイ・ブラウント (Bessie Blount) との愛人関係だった。現代ならどうかすると、これだけで逆に妻の方から離婚を要求しかねないわけだが、王権絶対の宮廷生活という要素は別としても、この時代はまだまだ男性が好き勝手にふるまい、女性は受け身にまわる、いわゆる男性優位の社会だったし、それにキャサリン自身の貞節、かつ、しっかり者の性格が、事態に対し、いわゆるはしたないとして、忍従でのぞむ立場をとらせた。

が、キャサリンは国民から尊敬され、慕われ、人気があった。彼女は王妃の身をもって修道女の姿に身をやつし、貧しい家々を訪ずれて慰めるといったことなどもしていた。国民はそうした彼女のやさしい、よく出来た人柄を知っていた。

ヘンリーも教養のずばぬけた、性根の正しい妻に対し、一目おかないわけに

はいかなかった。女性の格において男に色目をつかいながら宮廷を泳ぎまわる、そこいらの尻軽女たちがとうていたうちでできる相手ではなかった。ヘンリーとしても精神的な支え、話し相手としてキャサリンがこの時になってもまだ必要だった。そんなわけで彼女の王妃の地位は練獄に入ってから、まだゆるがなかった。

しかし、ヘンリーの浮気はたががはずれだしたのも事実だった。イングランドの宮廷の女性たちは、スペイン宮廷の女官たちとくらべると、概してだらしがなかった。そしてヘンリーの方は稀代の絶倫男ときていた。だからそこに展開するのは、なまめかしい女がたむろするハーレムとその中で冒険にうき身をやつす好色王という図式になった。

スペイン王、カルロスにもどると、22年6月、スペインに独乙から渡る途次、またイングランドを訪ずれている。この時は1ヶ月、滞在するが、22歳の彼は叔母のキャサリンの前に膝まづき、祝福をもとめるといったことまでする。スペイン王にして、さらに神聖ローマ皇帝である若者のこのようなへりくだった態度は、人々の好感を呼んだ。(それからカルロスは6月2日、サザンプトンを出航、スペインに向う。スペインのサンタンデルに上陸するのが7月2日。)なお、当時のしきたりのこととて驚くには当たらないが、この青年カルロスとキャサリンの娘、メアリ・チュードルとの縁談話が両国の間ですすめられていた。カルロスはキャサリンの姉、フアナの長男だから、カルロスとメアリの二人は従兄妹であった。が、メアリはまだ6歳にすぎなかったわけで、これにはあきらかに無理があった。しかし、この計画はなお沙汰やみになることもなく継続する。

こうしてヨーロッパの国際政治のうえできわめて重要な年である1525年がくる。すなわち、カルロスの第一次対仏戦争と、その大勝利があるのがこの年なのである。舞台はイタリアの北部、ロンバルディアで、2月25日、カルロス軍

はバピア（ミラノの南，30キロ）の戦いで大勝利をはくする。それもただの大勝利でなく，敵のフランス軍の残した死者は6千から8千という戦果にもってきて，あろうことか，敵の国王フランソワを捕虜にさえするという信じがたい幸運まで手にする。（このフランソワはヘンリーがフランスに出かけ，例の《錦繡の宴》くりひろげた時の相手であることはことわるまでもない。）

フランソワは手厚くバルセローナからバレンシア経由で，マドリーに送られ，その地で幽閉される。国王が捕えられたというのはそうざらにあるものではなく，フランソワの屈辱は想像にあまりあった。これから牢獄内のフランソワとカルロスの間で結ばれるのがマドリー条約（1526年1月14日）であって，状況からしてその内容が一方的にカルロス優位に出来上っていたことは言うまでもない。ヨーロッパにおけるスペインはこの戦争，そして条約によって断突の大強国の地位につく。

しかし，当時の国際関係のあり様はこうしたあまりに強くなりすぎた国が出現すると，敗者を中心に，みんなで手を組み，その国をうちたたくことを策するというのが法則であった。それどころか，当のフランソワ一世はスペインから解放され，（1526年3月10日，スペイン・フランス国境の Bidasoa 河で二人の王子と交換に自由の身になる。）再び故国の地を踏むやいなや，不信もいいところだけれど，スペインとの約束破棄を宣する。

こうして生れるのが敗者フランスを囲んでスペイン攻撃を目的に汎ヨーロッパ的規模のもとに結ばれた《コニャック同盟》（Liga de Coñac. 1526. 5. 22）であるが，この際，私たちにとり重大なのはこの仲間にヘンリー八世のイングランドも入っていたことである。

ヨーロッパにはようやく暗雲がたちこめ，軍事情勢はあわただしく動きはじめる。この対スペイン同盟にはフランスと親しいオスマン・トルコも呼応し，カルロス攻撃の作戦に出て，ウィーンを背後からおびやかす（1529）。そもそもイングランドのそれまでの経略というのは，この国得意のバランス・オブ・パ

ウアーの政策をもって、スペイン、フランス両大国の間をあちらに付いたり、こちらに付いたりしながら、上手にかじ取りしてゆくということにあった。キャサリンをスペインから迎え、王妃につけるというのもその一つのあらわれであった。それがここにきて変様し、スペインを仲よくする国としなければならぬ理論的、現実的基盤はなくなった。こうなると、王妃キャサリンの存在意義はなくなる。キャサリンの離婚問題を必然ならしめる要因の背景はこゝにあった。

ところでカルロスはヨーロッパ全体の脅威にスペイン＝独乙がなってゆく過程の中で、きたえられ、たくましさを与えていった。齢も25歳、少年時代以来の顧問たちからの独立をはたし、自信にもあふれ、名実ともに大国の君主だった。おずおずとヘンリーの前に出て、口もろくにきけなかった、20歳ごろの彼の面影はもはやなかった。

彼におけるスペイン化も見のがしえない。はじめはちんぷんかんぷんであったスペイン語も達者にこなすようになり、国民性へのとけこみも深まり、スペインの王らしい王へと脱皮してゆく。

カルロスは結婚する。相手は母方のいとこであるポルトガル王女、イサベル（1503—36）であって、薦たけたその麗しきは、お世辞ぬきヨーロッパ王室中第一の美とうたわれていた。先に言うごとく、26年1月、対仏条約を片づけたカルロスはその3月、南国の春の花が妖しく咲きかおるセビリアのアルカーサルで彼女と結婚式をあげる。その日は波瀾万丈だったカルロスの生涯における幸福の頂点とよんでよかった。

ただし、そのためにはイングランドのキャサリンの娘メアリ・チュードルとの婚約のわずかな継続みたいなものを、若干のもん着をもって外交的に解消する手つづきが必要だった。

新婚のカルロスとイサベルは5月中旬までセビリアに暮してから、コルドバ、ハエンを経て、6月はじめグラナダのアルハンブラに入る。かつてのアラビア

の宮殿になやましく甘美な夏がそろそろこようとしていた。ここはわたしたちのキャサリンが27年前、イングランドへの輿入れの旅に出発した場所である。イサベルはこの地で懐妊する。

そして翌1527年2月22日、バアジアドリードに入った王夫妻には、5月21日、王子が生れる。歴史上、あまりに名高いフェリペ二世（—1598.9.13）がこの王子である。

おおよそそれと時を同じくして、西洋史上、大不祥として知られる《ローマの掠奪》（5月6日から）が起る。おそるべきこの集団的破壊行為の張本人はまさにカルロスの軍隊であった。この衝撃的悲劇を前にしてヨーロッパ中にどうこうたるカルロス非難がわきおこる。

大体この時期、ヘンリーの中にキャサリンに対する離婚の意志が生じる。それまでは不貞、つまり浮気にとどまっていた。これが練獄であるが、第二期のこの練獄の次にかくしてくるのが第三期の、つまり最後の地獄である。年齢的にはキャサリンははや42・3歳になっている。

その頃ヘンリーには、アン・ブリーン（Anne Boleyn. 1507?—1536）という恋人ができ、同棲をはじめていた。アンの母親は貴族の出だったものの、父親は富裕な商人で、金の力をもって貴族の仲間入りを果たした男だった。アンには姉がおり、フランスの宮廷につとめてから帰ってくると、キャサリンのもとに女官として出仕していた。その姉をヘンリーは2年間、情人にしていた。そこへアンがまたフランスから帰国し、姉の手づるで女官になる。それにヘンリーが手をつけ、愛情関係をむすぶ。

ヘンリーには子供としては女兒のメアリがいるだけで、男の後つぎがない。そこでアンと結婚し、彼女が男子をもうけることに賭ける。そのためにはキャサリンと離婚しなければならぬ。しかし、これはどう考えても理不尽きわる企てだった。

ヘンリーのこの企てにはその前にそそりたつ難関があった。それはローマ法王庁だった。離婚を禁じているその制度にあって、どうしてもそれを求めようとすれば特別な認可が必要となってくる。ヘンリー側からそのための交渉が熱心におこなわれたのはもちろんだったが、法王庁の態度はきびしかった。それにはわけがあったというのは、スペイン王カルロスの存在がそばにあったからである。叔母のキャサリン——20歳や22歳のころ、イングランドを訪ずれた際、彼女の前に膝まづきさえているカルロスだった——へのいわれなき離婚をカルロスが宥したがないのは当然として、その当時、ローマ法王庁はイタリアをなかば支配するカルロスの政治的圧力のもとにあった。

しかし、カルロスの介入の線もそれが限度だった。彼の方は彼なりに取り組む問題を大陸で山とかかえていた。つまり、第二次対仏戦争(1526—29)のさなかにあったほか、1530年にはイタリアのボローニアでの皇帝戴冠式(2月24日)、1532年にはウィーンの防衛といった風だった。北アフリカ沿岸方面も目が離せなかった。

想うにこの度のヘンリーの離婚騒動には特異性が二つあった。一つはその企てにおける理不尽の図抜けた大きさにあった。そして第二は、その理不尽を強引に実現へともってゆく意志と手腕の図抜けた大きさにあった。そこには暗愚と知脳が同居していた。くりかえしになるが、これほど矛盾がかたまった分裂人間も歴史上、めずらしかった。

それをよく語るのが彼の肖像である。この代表作とされるのはハンス・ホルバイレ(Hans Holbein, 1497/8—1543)描くもので、ウインザー王宮、そしてリヴァプールのギャラリーなどにある。名画として評価の高いこれらからまず印象づけられるのは、服装、ポーズ、画面の構成等といった絵画的な美であるが、もっと興味をひくのは、それらを通じての画家による人間個性への分析・解剖である。それをここに筆者の言葉をつかって再生してみると、やや肥満気味の、堂々たる体格の立派さにともなう王者の貫録。そこにある高邁、寛

厚といった徳を含むところの、生れながらの大政治家だけがもつ威厳。それとともによく観ると、そこには繊細、鋭いセンス、創造意欲といった芸術的天分ものぞいている。

しかし、同時にその反面、強くあらわれている尊大、傲慢、野心にも注目しないわけにはいかない。これには気まぐれ、衝動性、冷酷、猜疑心、嫉妬といった暗い要素も結合している。

またさらには、臆病、姑息、ずるさ、安っぽい自己本位性、といったもっとも軽蔑すべき心情もそれらの陰にちらついている。(ヘンリーは実際、壮年時代、疫病が猛威をふるうと、わが身大切から、家族や家来をほったらかしにして、城から城へと国中をにげまわったような男だった。)そして画面にあらわれた彼のしたたかのしゃれっ気は女性への関心をかたっているともみべきだが、そこには気のせいか、色情狂的な傾向さえひそんでいるようでもある。

またそれらと並行するようにして息づいているのは、ひとりよがりの子供っぽい楽天性であって、これには、こちらがクスッと笑ってしまいそうな、一種の滑稽ささえただよっている。

人間の性格をこれほど完全なまでにつかみとる絵画の表現力というものにはつくづく感銘せざるを得ないとして、シェイクスピア作《ヘンリー八世》の主演の扮装には時々、ホルバインのこの肖像がそっくりつかわれることがあるといわれる。ところでキャサリンの離婚事件におけるヘンリーの精神姿勢には、これら資質のすべてがあふれている。

国家の運命をまきこみさえた、ヘンリーの恋の相手のアンは、つたえられるところによると、顔もスタイルもそれに価するほどの女性ではなかった。頭もよくなかった。そしてその時代には大切なこととされていた唄も踊りも、上手というわけにはいかなかった。それはともかく、もっとも重大な、王妃がそなえるべき、やさしさ、真面目さといった徳となったら、みじめとしか言えな

かった。

しかし、ヘンリーの彼女への熱心はまさに強烈そのもので、事態は国内的にはキャサリン離婚の成立へと、そして国際的にはイングランドに対するローマ教会からの破門へと、確実に動きつつあった。

ヘンリーがキャサリン離婚を正当化するためにつかつたのが旧約聖書レビ記、20章21節の《人がもしその兄弟の妻を娶るならば、これは汚いことである。彼はその兄弟をはずかしめたのであるから。彼は子なきものとなるであろう》の個所であった。彼の論法によると、キャサリンは兄のアーサーにいったん嫁した女である、これを兄の死後、妻にすることはこれにあるとおり、禁じられている、従ってその結婚は無効である、後つぎができないのもこれからくる神の罰なのだ、ということになった。

こんな勝手な屁理窟を持ち出しながらの、離婚へとついに到るいきさつは、イングランド史にくわしいから、ここに取りあげることはやめ、キャサリン個人の周辺の推移を、特にその代表的シーンのいくつかに重点的にしばってとりあげることにする。

ヘンリーはキャサリンにおそれを抱いていた。で、離婚を申し渡しに訪ねてゆく時、口では言えないため、文章を紙に書いてゆき、これをキャサリンの前で読みあげる。キャサリンは黙って耳をかたむけている。二人は罪に生きていた、別れねばならぬ、というくだりになると、キャサリンはすすり泣きをはじめめる。彼女にとってヘンリーは最愛の夫であり、否、偶像であった。もし彼の言うとおりなら、6人、もしくは7人の子がその中から生れた熱い抱擁の歴史は嘘だったというのだろうか？ 2人の夫婦生活の重みは永い年月のおもみ同様、どうにもならぬ真実として彼女の上にのしかかっていた。そうした彼女にすれば、ヘンリーの説くレビ記云々などは、笑止千万の詭弁以外の何物でもない。ヘンリーはキャサリンを一人絶望の中にのこして行ってしまう。

キャサリンの方は激情が去り、混乱した心が落着きをとるもどしてゆくと、



私は今迄、ヘンリーのまことの妻だった、そして今もそうであり、これからもそうであろう、という覚悟が腹の底から湧きだしてくる。

一方、アン・グリーン一族の宮廷内での羽ぶりはこのころになると、もう王侯なみであった。ところがヘンリーや彼等の意をうけ、ローマ教会相手に離婚問題の交渉役をつとめているウールジの努力は、いっこうに成果をあげない。これに対して、ヘンリーやアン一族のいらだちはつのってくる。ウールジへのヘンリーたちの信頼にかくしてかげりがさしはじめる。

ヘンリーはキャサリンに使者をおくり、どこかの修道院に尼として入ること、それを納得すれば潤沢な年金を支給する、といった旨を伝える。が、王妃で今もいる、との立場を捨てていないキャサリンはその申し出をきっぱりはねつける。

このヘンリー、キャサリンの一連の離婚騒動について、私たちを正直いって驚かせもするとともに奇異の感じにさそいもするのは、キャサリンのヘンリーへの揺らぐことのない愛情であって、当然、夫を最低男として憎み、軽蔑してよい、というより軽蔑せねばならぬ今の時になっても、彼女にはその気がなく、毅然たる中に、夫への思慕と忠節をすてなかった。その当否はとも角として、その精神的姿勢の頑固なまでのひたむきさは注目に価する。

一体に《スペイン》の民族的資性として、一旦こうときめた思想への不死身といえるまでの徹底した献身、つまり精神的がんばりが古来、あげられるが、もしキャサリンのこの姿勢を一つの思想と眺めるとした場合、そこに彼女の享けたスペイン人の血のほとばしりを見ることはできるかもしれない。このキャサリンの妥協を排し、不退転の決意に生きる態度をスペイン20世紀の代表的批評家、マダリアーガは、英雄的と呼ぶばかりでなく、これほどの偉大な魂の女性人類史に珍らしいとさえたたえている。

ヘンリーの王妃離婚の意図が明るみになるにつれ、イングランドの国民はキャサリンに味方した。キャサリンを街でみかけると、拍手をおくり、万才を叫

ぶ。その一方、ウールジとその相棒のもう一人の枢機卿をみかけると、無気味なだんまりで迎えたり、罵声を浴せたりした。

これに対して二人の枢機卿も負けていず、キャサリンに人前に姿をあらわさぬよう脅しをかける。キャサリンはそれに従う。すると、民衆は自分たちの方から彼女の顔を見に、宮殿の裏口にあつまってきた。

ヘンリー側は企てへの障害を封じるため、あらゆる場所での、そしてあらゆる手口でのテロをつかうことに躊躇しなかった。多くの人々は眉をひそめながらも、それへの恐怖のためやむなく黙することを選び、キャサリンのもとから去ってゆく。

1529年6月21日の、ブラックフリアル（Blakfriars）修道院でのキャサリンを被告とする裁判は記憶に価する。キャサリンは天蓋の下で王座につくヘンリーの前にうやうやしげにひざまづく。それから論告をきいた後、彼女は心のこもる雄弁をもって自己の意見を陳述する。ヘンリーは返す言葉がなく、黙りこんでいる。それを後にして、彼女はゆっくりと広間を去ってゆく。

次の日の法廷にはそれへの出頭を命ぜられながら、キャサリンは欠席。

その年の11月3日、大法官ウールジはアン・グリーンからの、私腹をこやしているとの告発により逮捕され、14年間、維持した独裁的地位を一挙に失う。その飛ぶ鳥をおとすほどの全盛時代をおもうと、うそみたいな結末だった。30年11月29日、死去。

しかし、1531年7月、あれほど手ごわい抵抗をみせていたキャサリンもついに王宮を引きはらい、アンプトヒル（Amptthill。ケンブリッジの西南西、45キロ）の館に移らねばならなくなる。その時も男らしさからおよそ遠いところを歩んでいるヘンリーは、キャサリンにじかに会って《さよなら》を言うことはなかった。

使用人の数はごく限られ、娘のメアリとも一緒に住むことは許されない。

婿のあかない析衝のつづいてきたヘンリーと法王庁との関係もこの間、いよいよ最悪段階を迎えていた。

そしてついに1533年になってアンは懐妊する。ヘンリーは42歳。アンは約26歳。生れてくる子を庶子としないで、正嫡にするためには、その前にキャサリンを正式な法的決定をもって離婚しなければならぬ。急がねばならなかった。

かくして5月8日、ヘンリーとキャサリンの結婚無効を審議する法廷がひらかれ、23日にその法廷は無効の裁定をくだす。

6月1日、ヘンリーとアンのウエストミンスター寺院での戴冠式。王妃の威儀をもってロンドンの街をねりあるくアンに対して、集った民衆は露骨な敵意を示し、悪態をあびせて、恥をかかせる。

その戴冠式から3ヶ月の9月7日、アンは出産する。が、生れてきたのはあれほど待ちこがれた男子ではなく、女の子だった。その子はエリザベス (Elizabeth. —1603.3.24) と命名される。

ローマ法王庁との対立はどうなったかという、ついに決裂、その翌年の1534年、国王至上法が発令され、ローマ教会から独立、《王をイングランド国教会の地上唯一最高の首長と解し、認め、かつ見なす。》とするところのアングリカン教会（イギリス国教会）の発足となった。

さて、キャサリンの方はそのころどうしていたか？ 彼女は地方の邸館から邸館へと使用人をつれて移動していた。移るたびに住居は劣悪の度を加え、王室からの支給金の額は極端に減小、使用人の数もわずかになってゆく。しかし、キャサリンはそのころになっても王妃の称号をつかうことをやめなかった。中央政府から厳重な注意がきても聞くような彼女ではなかった。(キャサリンは離婚されるとただちに Kimbolton に隠棲すると書く本が少なくないが、それは間違いで、キンボルトンは最後の落着き先だった。)

彼女の健康はだんだん衰えるとともに、その環境は品位をもって生活を維持することがむずかしくなってゆく。

しかし、祈りと涙の中で暮らす彼女の評判は国中につたわり、旅の途中にある彼女のもとには同情する民衆がおしよせ、果物を含む心こめた贈物を差し出す。イングランド国民の良心と善意がまだ地におちていないことを示すこのエピソードは、キャサリン受難の物語りの中での一つの救いを私たちに与える。

〔シェクスピア（1564—1616）の《ヘンリー八世》（1613作）をみると、この最後の作品の真の作者がはたして誰であるかといった問題はとも角として、その大部分はヘンリーのキャサリン離婚のテーマから成り、しかもその書きかたはキャサリンの気高く威厳にみちた姿への愛悼の念でつらぬかれている。これを見ると、事件から80年たった時点でも、イングランド国民の間にキャサリンへのあたたかい想いが脈うっていたことが分る。〕

しかし、情況はきわめて危機的だった。

ここで登場してくるのがカルロスの神聖ローマ皇帝の方の在イングランド大使として働いているエンスタッチ・キャプイス(Enstach Chapuys。キャピシェースの名のもとにシェクスピアにも出る)である。遠くから気をもむだけのカルロスとちがって、大使の方は外交特権を有利につかえもすることで、キャサリンのためはなはだ行動的だった。この人物によって企てられたキャサリン一生の最後を色どる、おどろくべき一つの救出計画劇をここに紹介するのは無駄ではあるまい。

その計画の顛末は次のとおり。ずっとキャサリンの相談相手できたこの大使は、ここでキャサリン救出の破天荒ともいえる計画を想いつく。彼はその巾広い付合いのおかげで、イングランド中からあつめた情報を総合して、貴族、僧侶、商人の中のかかなりの部分、そして大衆のほとんどすべてがキャサリンを支持していること、そして国王ヘンリーから民心は離れていること、そうした結論に達していた。そこでキャサリンと娘のメアリをオランダに連れ出し、スコットランド王とも連携作戦をとりながら、ヘンリー打倒ののろしをあげれば成

功は間違いない、と彼なりに踏む。これは《Catherine of Aragon》の著者、G. Mattingly がその本の中ではじめて明るみに出したもので、このアメリカ人はそのための研究の中でこの救出計画をねるための大使が地方の有力者たちとかわしたかずかずの書簡をみつけたのだった。

もっとも著者は成就確実と見ているけれど、しかし、筆者はかならずしも同意見ではない。キャサリンのすでに衰えだしている健康の件は別としても、ヘンリー側の情報機関が事前に陰謀の気配をかぎつけないはずはない。そして先手をうってくるというのが一つ。それとヘンリーから国民が離反しているという状況は客観的にみてどれほどであったのか？ これらからして不安を感じる。とも角も、歴史上のこういう仮定は結局、起ってみなければ分らない。大使の計算ちがいでみじめな結果に終わった可能性は少くない。しかし同時にその反対に国家をゆさぶる大クーデターへと発展し、輝かしい成功をみた可能性も否定しがたいわけである。

大使は永い熟考のすえ、はじめてキャサリンに計画を打明ける。大使としては、場合によると、外国脱出は娘のメアリだけでもよかった。

が、キャサリンの答えは《ノー》だった。自分のことで血を流したくない。そしてそれは法律と夫への反逆を意味するから、ということだった。驚くべきことは、彼女はこの期になっても、ヘンリーの妻のつもりであり、夫を愛していた。

大使は歯がゆい想いで引きさがらねばならない。

しかし、ヘンリーによるテロが吹きあれるこの国にあって、勇敢にもキャサリンの離婚にはじまるこうした政治をがんとして是認しない気骨のある人物がいなくはなかった。その中の主だった二人がトーマス・モア（1478—1535）と、ジョン・フィシャー（1459—1535）だった。前者はロンドン塔に15ヶ月つながれた末、1535年7月6日、反逆罪のかどで処刑。後者も同年7月22日処刑。彼の首は槍の先につきさされ、ロンドン橋の上にみせしめのため、さらされる。

おなじくキャサリンを大逆罪にもってゆき、アン一門の支配を確立するための法令が發布され、キャサリンのもとに使節がつたえにゆく。が、もちろん彼女は断乎として受けつけることを拒む。19歳の娘のメアリにも同様のおどしがかかる。彼女は母と会うこともできず、近くにおかれている。

使節が退去を命じに訪ずれることも2、3回にとどまらぬ。と、扉ごしにそれを伝える使節に対し、《私の方からそれをする気はない。必要なら、あなたたちの方で扉をこわし、私を力づくでつれだせば、いいでしょう。》と答える。

土地の群衆はキャサリンの側についているので、さすがの使節も手をだすことはできない。ある時などは、ナイフや農具で武装した彼等が使節をかこみ、今にもおそいかからんばかりの情景さえ呈する。――

そんな経過をたどりながら、キャサリンの流浪の旅はつづく。

毒殺のおそれがあった。それで大使はキャサリンへ目の前で侍女がつくる物以外は口にしないよう厳重に忠告する。

そして遂の住家となるキンボルトン（ケンブリッジの西南西、45キロ）の館に移る。小さく、不潔で、たえがたい環境だった。

が、この時になっても、大使は反乱の計画を捨てていなかった。

こうした状況の中で、キャサリンの体はだんだん弱ってゆく。彼女の毎日は2・3人にまで減ってしまった侍女を相手に、孤独とメランコリーにひたることだった。

そして死がくる。1536年1月7日、2時間ほど夫、ヘンリーと娘、メアリの魂のために祈ってから、ヘンリーあての遺書をかく。彼女の心は宗教的諦めから平静だった。彼女はヘンリーとメアリ、そしてイングランド国民の上に神の加護と慈悲を祈り、最後に彼女亡きあと、使用人を路頭にまよわせないための配慮をヘンリーに願って筆を擱く。

こうしてまさに波瀾万丈の生涯のはて、51歳をもってキャサリンは息を引きとる。

彼女の死は、永い間にわたり毒をもられて殺される手の、当時よくつかわれた毒殺の匂いがきわめて濃い。というのは彼女本来の戦闘精神からすると、その死にかたがもろく、他愛なさすぎ、どこか不自然さがつきまとうからである。

土地の民衆は徳高きキャサリンの死を心からいたみ、盛大な葬儀を禁じるヘンリーの命にもかかわらず、寒村では総出ともいえる5百人もの人々がとむらひに加わり、35キロ北東のピーターバラ(Peterborough。ケンブリッジの北西北、50キロ)寺院まで柩を交替で担いだ。

ヘンリーはキャサリンの死を知ると、歓びのあまり、頭から足の先まで黄色で統一し、帽子には白い羽をつけるという、格別ないでたちのもと、アンをともない、王宮で大舞踊会をもよおす。そして娘のエリザベスを招待客にみせびらかす。すると彼等は《勝った。勝った。》と叫んで祝賀するのだった。

キャサリン埋葬の日、アンは男子を流産した。

もうそのころ、ヘンリーはジェイン・シーモア(Jane Seymour。1509?—37)と通じ、彼女の胎による男児出産を待ちうけていた。そうになると、アンを消さなければならぬ。かくしてアンの兄を含む五人が突如、近親相姦のかどで逮捕され、つづいてアンが密通のかどで逮捕。

5月19日、アンは斬首の刑に処せられる。拷問に覚えかねたアンはすべてを認めたが、キャサリンの毒殺だけは最後まで否定した。が、皮肉なことに彼女のおかした本当の犯罪はキャサリンの毒殺だけで、残りは全部潔白だった。刑場におもむく彼女は悪びれたところもなく、昂然としてひかれていったという。アンはショックから精神錯乱をきたしていたのだ。

アンを斬首にしてから10日後までに、ヘンリーはその第三の妻、シーモアと正式な結婚をする。が、待望の男子エドワード(六世)(Edward。1537.10.12—53.7.9)を生むと、その12日後、そのお産のため彼女は死ぬ。

これから1543年までの7年間に、ヘンリーは四番目、五番目、六番目と三回の結婚をする。その中の五番目の妃、キャサリン・ホワード Catherine Howard。1521?—1542) も姦通の罪で処刑される。

しかし、キャサリンが死に、アン・ボーレンを殺したところの1536年のこの年に、ヘンリーは政治でおもいきった仕事をしている。修道院解散によるその土地財産の国庫への没収がその第一で、これは国家権力の教会勢力に対する支配を意味した。これの背後にはそれで懐をうるおす貴族、郷士、ブルジョアが存在があったことはことわるまでもない。これと平行してこの年、ヘンリーは財務諸機関の新設による官僚制度の整備に着手する。また領土拡張にも乗りだし、ウェールズの併合、アイルランドへの遠征も実行している。こうしてやっぎばやにはなばなしい一連の偉業をやったのけるヘンリーであって、そこが矛盾人間の面目躍如たるゆえんである。

一方、スペインのカルロスも多事をきわめている。1535年5月、アフリカのチェニスへの渡洋作戦はかくかくたる勝利に終るものの、キャサリンの死んだ36年から第三次対仏戦争が始まり、その8月、プロバンスでの大敗北がある。

こうしてイングランド王、ヘンリー八世は老境へ入ってゆく。晩年の彼は病的な肥満症をわずらっていた。また梅毒にかかっていたとも言われる。1547年1月28日に、56歳でもって死ぬ。

あれほど不遇なおいたちを強いられたキャサリンの娘、メアリは歴史の神の計りがたいいたずらによって、イングランド女王の座につく。時に1553年10月1日。メアリは38歳だった。そこへ従兄のカルロスの息子、すなわちスペイン王子フェリペ(二世)がカルロスの命により、いやいや掣入りする(1554年7月)。彼はメアリより11歳若かった。彼はスペインから大艦隊をひきいてイングランドにおもむくのだが、結婚式は南イングランドの Winchester で7月25日、行われる。彼女はそれから4年しか生きない。その結婚生活も苦渋にみち



ていた。ファナチックなカトリックであったところからくる所業により、《流血のメアリ》(Bloody Mary, la reina sangrienta) の名で呼ばれるのが彼女である。母親のキャサリンから彼女はスペインの魂をうけついでいた。この女性の、アントニオ・モロ(Antonio Moro。1519?—76) えがくところの、すぐれた肖像画を私たちはマドリーのプラド美術館にみることができる。(第60室。作品番号, 2108)

### 参考文献

Espasa-Calpe/Historia de España.

Tomo XVII. Los Reyes Católicos (1969).

Tomo XVIII. Carlos V (1966).

Gallach/Historia de España.

Tomo III. La Baja Edad Media (1967).

Tomo IV. La Casa de Austria (1967).

Revista de Occidente/Diccionaria de Historia de España.

Tomo I. II. III. (1968).

S. de Madariaga: Catalina de Aragón (Austral. 1975).

Oxford/History of England.

Vol. VII. Earlier Tudors (J. D. Mackie. 1952).

G. Mattingly: Catherine of Aragon (A. N. S. Pr.. 1942).

岩波講座/世界歴史

第14巻。近世(1) (1669)

第15巻。近世(2) (1969)

第16巻。近世(3) (1969)

大野眞弓編/イギリス史 (山川出版社。1977)

J. R. グリーン: イギリス国民の歴史 (続) (和田勇一訳。篠崎書林。1986)

G. M. トレヴェリアン: 英国社会史 (上) (林健太郎訳。山川出版社。1949)

マコーリー: 英国史 (上) (中村経一訳。旺世社。1948)

D. M. グリュウ, H. プラスキット: イングランド史 (II) (林達他訳。学文社。1973)

ポール・ニコル: 英国史 (高山一彦訳。白水社。1973)

アンドレ・モロア: 英国史 (上) (水野成夫訳。白水社。1940)

森 護: 英国王室史話 (大修館書店。1986)

西洋史辞典 (京大西洋史研究室編。東京創元社。1975)

シェクスピア: ヘンリー八世 (小田島雄志訳。白水社。1985)